

Title	北朝隋唐時代における漢族士大夫の教育構造
Author(s)	長部, 悦弘
Citation	東洋史研究 (1990), 49(3): 466-492
Issue Date	1990-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154341
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

北朝隋唐時代における漢族士大夫の教育構造

長 部 悦 弘

序

第一章 北朝隋唐時代の學校

第二章 血族による教育

第三章 姻族による教育

第一節 男性による教育

第二節 女性による教育

結 語

序

六朝隋唐時代の士大夫にとり、學問を身に附けていることが、士大夫として認められる必須條件であつたことは、從來の研究から言つてよいであらう。⁽¹⁾ここで士大夫が學問を教つた場に眼を轉ずると、六朝時代には教育の中心が學校ではなく、士大夫の家族にあつたことは、陳寅恪氏により既に指摘されている。⁽²⁾士大夫が六朝時代には家を據點に學問を子弟に教育し、代々傳承する構造が成立していたのだが、逆に言い換えると、學問を代々傳える家が六朝時代には士大夫の家と認められたと考えてよいであらう。

唐代の教育については、これまで多賀秋五郎氏が國家により建てられた學校を中心に、最も丹念に敘述された。唐代の

國立學校は貞觀時代に最盛期を迎えるが、かかる盛況は爾後變わりなく存続したのではなく、唐末まで幾度かの中絶を経ていることは、氏の記述から明らかである。⁽³⁾ここで注目したいのは、國立學校の中絶期に、士大夫が何處で子弟を教育していたかということである。士大夫にとり、緊要事と言ってよい學問の習得が、國立學校に専ら頼り、その盛衰に左右されることはあつてはならないことであろう。かく考えると、唐代において國立學校の盛衰に影響されず、士大夫が中絶されることなく、恆久的に學問を會得する安定した構造が成立していたものと豫測される。今日までの研究では、かかる構造は唐代についてのみならず、六朝時代についても、まだ十分考究されていない。ここでは六朝時代にまで範圍を及ぼして、かかる構造を探ってみようと思う。

さて、六朝隋唐時代における士大夫の教育の構造を考察することにより、五胡十六國時代以來、北中國で非漢民族の侵入・統治を被つたり、北魏末、六鎮の亂、唐代の安史の亂など戰亂と遭遇したりしながらも、漢族たる士大夫が中絶の危機にさらされていた漢文化の精華である學問を後世に傳へ得た祕訣が明らかとなる。だが、明らかとなると考えられるのは、文化傳承の構造だけに止まらない。

一般に、人間形成の上で家庭や學校において受ける教育が、大きな役割を果たすと言ってよいであろう。従つて、教育を等閑視したならば、その人間理解は不十分なものとなる。更に教育を通して各人の價值觀が培われ、それが根底に存在して政治的な行動や社會的な行爲として表面に現われるものと考えられる。この點、學問を體得することが必須であつた六朝隋唐時代の士大夫もまた、例外たり得ないであろう。六朝隋唐時代において、官或いは士として、國家機構や社會の上層の地位を占めた士大夫層が、行動規範を鍊成したと考えられる教育の實態構造を考察したならば、當該時代の國家と社會に對する理解を深める一助となり得るものと豫想される。かく期待されるがために、小論では時代を北朝時代から隋唐時代までに設定して、士大夫の價值觀はさて措くとして、教育の實態構造を考究することとしたい。南朝を考察の對象から外した理由は、南朝關係の資料に當たる餘裕がなかったからである。だが、北朝（北中國）にその考察對象を限っ

ても、異民族の侵入・統治を直接受けていた北中國の方においてこそ、南朝（南中國）においてより、學問繼承の方法が士大夫にとり切實な問題であり、繼承方法がより明確に浮かび上ってくるものと推測される。小論では、漢族士大夫の學問傳承の構造を闡明にする第一歩として、北魏・北齊・北周・隋・唐の各國家により設立された學校の運営状況を俯瞰することとする。

第一章 北朝隋唐時代の學校

北魏代の學校制度は、『魏書』84儒林傳序によつて整理することとするが、儒林傳序の記述には不備な點があるので、それに注意しつつみてゆきたいと思う。北魏では、太祖道武帝時代（三八六―四〇九）に（國子）太學が設置された。太明元帝時代（四〇九―四三三）に國子（太）學が中書學に改められた。世祖太武帝時代、四二六年（始光三）には、別に太學を建て、顯祖獻文帝時代、四六六年（天安元）には郡毎に鄉學を設けた。高祖孝文帝の太和年間（四七七―四九九）には、中書學を國子學に改め、皇子の學を開き、洛陽遷都後には國子太學・四門小學を立てた。この後、國子太學・四門小學が廢絶したのであろう。世宗宣武帝時代（四九一―五一五）には國學と小學を立てた。またその後國學が途絶したのであろう。肅宗孝明帝の神龜年間（五一八―五二〇）に國學を立てようとするが、中止し、五二一年（正光二）、國學を建てた。北魏が内亂に陥った、敬宗孝莊帝時代の孝昌年間（五二五―五二八）より後には各地の學校が廢絶し、孝武帝の永熙年間（五三二―五三四）には國學を再び開いた。

北齊代には、『隋書』27百官志中によると、中央に國子寺を置き、『北齊書』44儒林傳によると地方に郡學を開いた。北周では王仲犖撰『北周六典』4春官府（二四六頁）⁽⁴⁾によると、中央に太學があり、更に『周書』5武帝紀天和二年（五六七）の條によると、露門學を設置した。地方には『北周六典』4春官府9によると、州と縣に總管學・縣學を各々設置した。

隋代には、『隋書』28百官志下によると、中央に國子學・太學・四門學・書算學を設け、『隋書』75劉炫傳によると地方に州學と縣學が存置されていた。

唐代には、『新唐書』44選舉志上（以下、『新唐書』は、『新』と略稱）によると、中央には國子監に屬する國子學・太學・四門學・律學・書學・算學の六學が存在し、地方には州學・縣學が置かれた。

かく見來たると、北魏から唐代にかけて、中央には國子學・太學、地方には州學・縣學などの學校が、國立の教育機關として設けられたことがわかるであろう。北魏から唐代まで、かく制度上、學校が整備されたのはわかるが、しかしながら、制度上整備されたことと、現實に絶えず機能することは別である。その點をみてみよう。

北魏から唐まで學校がしばしばその本來の教育機能を停止し、開店休業狀態に陥ったり、廢絶したりした。北魏代では、前に述べたように、『魏書』84儒林傳序の記述から、孝文帝と宣武帝の間の時代に國子太學と四門小學が廢されたと考えられ、宣武帝と孝明帝の間の時代に國學が途絶し、北魏末六鎮の亂が廣がった、孝莊帝と孝武帝の間の時代に、國學は再び絶えた。國學の存する時も、國學博士はほとんど講義をしないありさまだった（『魏書』53李郁傳）。北齊では國子寺・郡學の官を勳功を擧げた人に賦與するが故に、學校が本來の役割を果たさず、士人も郡學に入るのを肯んじなかった（『北齊書』44儒林傳序）。隋代には、六〇〇年（開皇二〇）に太學に博士二人、學生七十二人を殘すだけで、國子學・四門學・州學・縣學を廢止し、學校の數を減らした（『隋書』75劉炫傳）。

唐代において士大夫の受けた教育が國家から實際に評價される機會が、科擧であつたことは、言を俟たないであろう。そこで、唐代士大夫の教育構造を、科擧を通してみてみようと思うが、その前に唐代における國立學校の運營狀況と士大夫の學校に對する評價とを一瞥しておきたい。

唐代の國立學校（國子監）は、七五五年（天寶一四）に起きた安史の亂を境に、その機能をほぼ失つたかのようにみえる。安史の亂より前、國立學校は六三二年（貞觀五）に學舍一二〇間を増築し、學生の定員も三二六〇人に増やしたの

みならず、高句麗・百濟・新羅・高昌・吐蕃諸國の酋長が子弟の入學を要請し、八〇〇〇人餘りにまで膨れ上がり、最盛期を迎えた（『通典』53、禮典13、大學）。五〇年後の永淳年間（六八二—六八三）以來、二〇年間、韋嗣立が證言する如く永淳年間より二〇年餘り國學の機能が停止した（『舊唐書』88韋嗣立傳。以下、『舊唐書』は、『舊』と略稱）。その後、國學は持ち直し暫く存續するが、七五五年（天寶一四）に、勃發した安史の亂により致命的打撃を受けた。安史の亂で國子監の建物が壞れ、兵士がそこに宿を借りているのを見て堪まりかねた肅昕が七六五年（永泰元）に學校を廢してはならないと上言したのを受け（『新』151肅昕傳）、朝廷は七六六年（大曆元）に國子監を修復するが（『資治通鑑』221大曆元年〔七六六〕の條）、往時の隆盛を取り戻すことは最早かなわなかった。この新國子監は學生の定員が當初なく、八〇七年（元和二）に至りはじめて定まった。當時西京長安の國子監は定員が五五〇人、新たに設置した東都洛陽の國子監は一〇〇人で、兩都の國子監の學生は合計六五〇人であった（『新』44選舉志上）。これは最盛時と謳われた貞觀時代の定員三二六〇人に遙かに及ばないばかりか、六六二年（龍朔二）に定めた員數二二一〇人にも満たず、その三分の一にしか過ぎなかった（『新』44選舉志上）。かく低く定員數を設けても、八一九年（元和一四）に國子祭酒であった鄭餘慶が、太學が安史の亂以來荒廢に歸し生徒が離散したので、文官の月俸中、百分の一をその修理費に當てるよう上請するほどの衰亡ぶりであった（『舊』153鄭餘慶傳）。

ところで、國立學校衰退の原因は、安史の亂だけではない。士大夫の學校に對する評價が變化したことも大きく關わる。安史の亂より前、開元以前には兩都の國子監を経ない進士は恥とされた（『唐摭言』1「兩監」）。しかしながら、國子監に對する士大夫の評価も、安史の亂を待たずして、その前夜である天寶時代に、一轉して下落した。その結果、國子監は入學者が減り、對抗策として廣文館を別に立てた。士大夫のかかる志向は押し止めることができず、安史の亂後、とりわけ貞元（七八五—八〇五）以降、學校は士大夫の蔑視的と化し、士大夫の子弟は入學を忌避した（『唐摭言』1「鄉貢」、『宋文公校昌黎先生集』37「請復國子監生徒狀」）。唐朝は科舉に應ずる士大夫に受験資格を與える條件として、國子監・州縣學に

入ることを、七六四年（廣德二）（『唐鑑言』1「兩監」）、八三三年（太和七）（『唐會要』35「學校」、『文獻通考』41學校考3「太學」、八四五年（會昌五）（『唐會要』35「學校」、『文獻通考』41學校考3「太學」）の三度に互り、義務付けた。かくも繰り返し國立學校への入學を強制した背景には、士大夫の學校に對する蔑視觀念が牢固として拭い難く存在していたことを物語っているであろう。以上を要するに、唐代の國立學校は七五五年（天寶一四）に起こった安史の亂と、天寶時代から始まった士大夫の國立學校に對する評價の下落とが相俟つて安史の亂以降、教育機關としての機能を著しく失墜したのであった。

さて、科舉合格者數の推移を、學校が倒壊する契機となった安史の亂を境に、『文獻通考』29選舉考2に掲載されている「唐登科記總目」を參照して整理し、果たして安史の亂により學校がその機能を失った結果、科舉の合格者數に變動が生じたか否か、確めてみよう。

唐初、六一八年（武德元）から七五六年（天寶一五）まで、一三九年間の秀才・進士・上書拜官・制科を合わせた科舉合格者は二九八九人、進士合格者は二七五五人で、一年平均、科舉合格者は二一・五人、進士合格者は一九・八人である。安史の亂以降、唐末まで、七五七年（至德二）から九〇七年（天祐四）までの一五一年間における科舉合格者は四九八一人、進士合格者は三九〇二人で、一年平均、科舉合格者は三三・〇人、進士合格者は二五・八人である。安史の亂より前と安史の亂以降の科舉合格者數を比較すると、前者より後者の方が一九九二人多く、進士合格者は前者より後者の方が一一四七人増えた。科舉合格者數・進士合格者數のいずれも、安史の亂以降、多く増加したのが認められる。尤も安史の亂より前が一一三九年であるのに對し、安史の亂以降が一五一年で一二年長い故、その分、後者の合格者數が多いのは當然であろうが、一年当たりの平均合格者數を比較すると、唐前半期の科舉全體の合格者の平均數は二一・五人、後半期のそれは三三・〇人であり、前半期における進士合格者平均は一九・八人、後半期のそれは二五・八人である。科舉全體の年平均合格者は、前半期より後半期の方が一一・五人、進士科の年平均合格者は前半期より後半期の方が六・〇人、各々多く、唐代前半期から後半期にかけて、科舉合格者が増えたと言える。後半期を更に、七五七年（至德元）から肅宗が國子

監を修復するように上言した七六五年（永泰元）まで、七五七年から國子監の定員を決めた八〇七年（元和二）まで、七五七年から鄭餘慶が修復するよう進言した八一九年（元和一四）までの三時期を設定して、國立學校の衰微が科擧合格者數に變化をもたらしたか否か、みてみよう。因みに以上の三時期の起點を七五七年に取ったのは、七六五年の蕭昕の上言を記した敘述、八〇七年の國子監の定員の設定したのを記した敘述、八一九年の鄭餘慶の上言を記した敘述のいずれも、國子監の荒廢が七五五年（天寶一四）に起きた安史の亂に歸因すると述べているからである。七五七年から七六五年までの九年間の科擧合格者は二〇六人で、進士合格者數は二〇六人で、各々一年當たりの平均合格者數はいずれも二二・九人である。七五七年から八〇七年までの五一年間の科擧合格者は一一〇一人で、進士合格者は一〇八五人であり、各々一年當たりの平均合格者數は二一・六人、二一・三人である。七五七年から八一九年までの六三年間には科擧合格者は一七九七人で、進士合格者は一五八三人であり、一年當たりの平均合格者數は各々二八・五人、二五・一人である。

ここで各時期における科擧全體の年平均合格者數と進士の年平均合格者數を比較してみよう。先ず唐代後半期全體の科擧の年平均合格者數に比べて七五七〜七六五年は一〇・一人、七五七〜八〇七年は一一・四人、七五七〜八一九年は四・五人ずつ少ない。進士合格者の年平均數は各々二・九人、四・五人、〇・七人ずつ少ない。かく唐代後半期の學校が停止した時期の科擧合格者・進士合格者の年平均數は、唐代後半期全體のそれらに比べて低い。しかしながら、唐代前半期の科擧合格者・進士合格者の年平均數に比べると、七五七〜七六五年は各々一・四人、三・一人ずつ多く、七五七〜八〇七年は各々〇・一人、〇・五人ずつ多く、七五七〜八一九年は各々七・〇人、五・三人ずつ多い。唐代前半期には學校が比較的順調に運営されていたのに對し、唐代後半期の上述の三時期は學校がほぼ停止していたにもかかわらず、停止していた時期の方が科擧・進士の年平均合格者數が多いということは、科擧に應じた士大夫が専ら國家により建てられ運営された學校に依存して學問教育を進めていたのではないことを示すものであろう。更に唐前半期で學校が中斷した六八二年（永淳元）から六九九年（聖曆二）までの一八年間の科擧合格者數は六〇八人、進士合格者數は四八五人で、各々年平均三

三・八人、二六・九人であり、唐前半期に比べ各々一二・三人、七・一人ずつ多く、この推論を旁證するであらう。

次に北朝隋唐時代の就學年齡をみることにする。北朝では、李謐が一八歳で四門學に入學（『北史』33李孝伯傳）、杜弼が一二歳で郡學に入り（『北齊書』24杜弼傳）、徐之才は一三歳（『北齊書』33徐之才傳）、楊尙希は一一歳（『隋書』46楊尙希傳）で各々太學に入り、十代に大體就學していたことがわかる。唐代でも、中央の律學は一八〜二五歳が就學年齡であったのを除き、中央の國子學・太學・四門學・書學・算學、地方の州學・縣學は一四〜一九歳で、十代が就學年齡であった（『新』44選舉志上）。

國立の教育機關以外に、教育機關として存在していたのが私塾である。私塾は私人が運営した點からみると私的機關だが、肉親以外の人々にも門戸を開放している點からみると、公的性格を帯びていえると言えらる。私塾は特に北齊代に盛んで、大勢の人々が熱心に良師を訪ね歩き、なかでも徐遵明の門下から優秀な經學者を輩出した（『北齊書』44儒林傳序）。

私塾への就學年齡は、魏質が一四歳の時に母親が幼いという理由で許さなかったのを振り切つて徐遵明の塾に赴き（『北史』56魏質傳）、呂思禮が一四歳で徐遵明に就くなど（『周書』38呂思禮傳）、十代だったと思われる。學問を習う所が、學校にせよ私塾にせよ、そこで學ぶには多くは家を離れて生活する必要があると思われが、家を離れた生活に耐えるのは、年齢が十代に到達していることが前提だったと考えられる。

通例、士大夫の子弟は、例えば李謐が一八歳で四門學に上がる前、一三歳にして『孝經』・『論語』・『毛詩』・『尚書』に通じていた如く（『北史』33李謐傳）、十代に學校に上がる前に經書を習っていた。中には例えば三歳で『孝經』を読んだ顔之儀（『周書』40顔之儀傳）、七歳で『周易』や『毛詩』を誦し得た呂方毅（『舊』79呂方毅傳）の如く、幼兒期に學問を習った者も認められる。

かく就學前に、漢族士大夫の子弟が學問を習った場所は、學校でも私塾なく、恐らく家庭であるにちがいない。漢族士大夫の場合、六朝時代家において代々學問を傳えてきたと言われるが、就學前に既に家庭で學問を習っていたと考えられ

るところから、漢族士大夫の學問教育の基本は家庭にあり、國家が設立・運営した學校の消長に左右されることなく、學問を後世に傳え得たと言ひ得よう。漢族士大夫は、子弟教育の上で國家の教育機關に専ら依存するということがなかったという意味で、國家から獨立して家を基本單位として學問を繼承していったのである。前にみた如く北朝隋唐期の國立學校は六鎮の亂や安史の亂のような戰亂により機能を停止したにもかかわらず、士大夫は家を據點に學問を連綿と傳え、當時の學問を擔った。

それでは、漢族士大夫は各家が全く他の家との横の連繋なしに學問を繼承してきたのであろうか。各家が單獨でなく、他の家と協力することにより、學問繼承の確實性が増すと豫測される。そこで次にかかる問題を究明しようと思うが、その前に先ず基本に立ち返って、漢族士大夫の家庭内での教育の構造を整理することとする。

第二章 血族による教育

士大夫の家庭において、子弟教育の責めを負った者として、儒教的教養を身に附け、士大夫として世に認められていた父親を最初に思い浮かべるのは、極く自然なことであらう。彭城郡出身の歴史家劉知幾は、幼年時代に父親劉藏器に咎打たれながら『古文尚書』を學び、その後遅ればせながら兄と机を並べて父の『春秋左氏傳』の講義を聴くのを許された經緯を述懐している（『史通』10「自敘」）。また隋代の重臣で武功郡出身の蘇威は、隋の文帝に向けて西魏政權で實力者宇文泰の輔弼であつた父蘇綽が『孝經』一卷を讀めば身を立て國を治めるのに十分であると説いたと告げているが、恐らく蘇威は父蘇綽から『孝經』の手ほどきを受けたのであらう（『隋書』75何妥傳）。父親は一家の生計を立てる上だけでなく、子供の教育の上においても、士大夫家庭の大黒柱であつたと考えられる。

父親が死亡して缺けた場合には、家族の他の年長の構成員が、年少の子供の教育に當った。この點を、確認してみよう。

先ず最も身近な構成員からみると、年長の兄が年少の弟を父の代わりに扶養することは、例えば李冲が長兄李承に育てられたり（『魏書』53李冲傳）、裴寂が兄たちの手で養われたりした如く（『舊』57裴寂傳）、北朝隋唐時代の漢族士大夫の家庭ではよくみられた。弟を扶養したと言っても、ただ單にその身體を養っただけでなく、その中に學問教育が含まれていたことは、房彥謙が長兄彥詢から學問を授けられ、七歳で數萬言を誦するようになったり（『隋書』66房彥謙傳）、崔玄暉が孤兒で貧しい子弟を教育したという例（『舊』91崔玄暉傳）が示す通りである。

父親と死別した孤兒の扶養の責務を果たしたのは兄弟中の年長者ばかりでなく、父の兄弟である伯父・叔父も責任を負ったことは、兄李瑒の死後、遺兒を引取った李郁（『魏書』53李郁傳）、兄柳檜が魏興郡で殺害された後孤兒を養った柳慶（『北史』24柳慶傳）、弟封祖曹の子封孝琬を鞠養した封隆之（『北齊書』21封孝琬傳）、甥の孔緯を庇護した孔溫裕・孔溫業の存在（『舊』170孔緯傳）が示している。

しかも扶養先の伯父・叔父の許では、例えば孤兒の岑長倩が叔父岑文叔に扱われた如く（『舊』70岑長倩傳）、我が子同様の待遇を受けた。その待遇とは、裴修が實子同様に慈しんだ甥に、別居の際、奴婢・田宅をすべて與えた例（『魏書』45裴修傳）から考えるに、動産・不動産を共用・共有することを、扶養している孤兒に許したのであろう。しかしながら、實子同様の待遇とは、單に物質的側面のみに止まらない。

扶養者たる伯父・叔父は、兄弟の遺兒にも實子同様に、學問教育を施したのである。例えば、顏眞卿が伯父顏肅（元孫・顏允南に教誨されて進士に擧げられ（『全唐文』310顏眞卿「顏惟貞碑銘」、柳元方が叔父柳建の訓育の結果、『春秋左氏傳』に通ずるようになったのは（同書310柳宗元「柳元方墓誌」、その例である。

更には、伯父・叔父より遠い關係にある血縁者でも、一族の孤兒を教育した例がみられる。後漢末の兗州別駕畢諶の後裔で、太原郡の畢宏が、東平郡の畢構一族が廣平郡で安祿山により覆滅された後、生き残った構の孫垌を七六三年（寶應二）の河北平定後、搜し出し、長安の自宅で學問を教え、明經合格に導いたのがその例である（『朱文公校昌黎先生集』25「畢

垆墓誌銘」。

ところで士大夫の家には、例えば牛僧孺が八代祖の牛弘以來傳えられてきた書籍一千卷を所藏し（『樊川文集』7「牛僧孺墓誌銘并序」）、李襲譽が揚州在住當時、俸祿の宗族に散じた残りで寫した書籍を子孫に遺した如く（『舊唐書』59李襲譽傳）、書籍が家藏され一族の子弟教育に供せられていた。北朝隋唐時代は寫本の時代で、版本の盛行する宋代以降に比べ流布する書籍の数が少なく、士大夫の家が所藏する書籍は、貴重であつたろう。⁽⁵⁾かかる貴重な書籍を保存すべく、藏書樓を建てた例すら認められる。例えば一族千人が集住していた江州廬山の陳氏は堂廡が數十間に及ぶ藏書樓を建て數千卷を納めた（『全唐文』333徐階「陳氏書堂記」）。

また子弟教育の場である學館が、弘農郡の名族で四世同居していた楊惲の家の如く（『北齊書』34楊惲傳）、士大夫の家に設けられたこともあつた。

ここに例を舉げた藏書樓を設けた陳氏も、學館を置いた楊氏も、いずれも多くの血族が起臥を俱にする生活形態を取っており、かく累世同居の如く多くの血族が生活していた士大夫家庭では、藏書樓や學館を教育活動の中心に据え、單に親子關係にある者だけでなく、祖父と孫、伯父・叔父と甥、從父兄弟の如くやや離れた血縁關係にある者同士の間で、年長者が後進に學問を教え、父親が時間に制約されて教えられなかった場合に他の年長の男性が扶助したり、また父親が弱い學問分野を他の男性が補完したりして、子弟を教育した光景がみられたことであらう。かく血族の固い結合を通して、士大夫は子弟を教育したことであらう。

『通典』の撰者杜佑の孫で、詩人杜牧の弟杜凱は幼くして父杜從郁と死別したが、學校に上がらなかったにもかかわらず、一七歳で『尚書』・『禮記』・『漢書』を読み、二六歳で「三十老明經、五十少進士」（『唐摭言』1「散序進士」）と言われるくらい難關であつた進士に合格したのは（『樊川文集』9「杜凱墓誌銘」）、周圍の男性が亡父に代わり教育したのが、功を奏したと考えられる。

これまで私は士大夫の同一血族内における教育の構造を考察してきたが、士大夫の血族が常に安泰で子弟を教育できるほど餘裕があるとは限らない。もし萬が一何らかの事情で血族に依って教育を受けるのが不可能になった場合、士大夫の子供は血族を除いて最も身近な關係にある母方の親戚、つまり父が婚姻關係を結んだ相手たる姻族が士大夫の家であったならば、それに頼り學問を修得していった可能性が最も高いと豫測される。今日までかかる可能性をまとまった形で考察した研究はないので、次にそれを検討することとする。

第三章 姻族による教育

第一節 男性による教育

前に父を失った孤兒が血族内の年長者たる兄・伯父・叔父に扶養されたのを確認したが、姻族に養われた例も少なからず見受けられる。姻族中、孤兒が頼った相手としては、四歳で孤兒となった孫嘉之が外祖父劉士傑に依った如く(『朱文公集』¹⁵⁵孫述「孫嘉之墓誌銘」)、先ず外祖父が擧げられる。また王凝が滎陽郡の名族で母の兄弟鄭肅に依った如く(『舊唐書』¹⁶⁵王凝傳)、母方の伯父・叔母に頼った例も認められる。

姻族に歸した孤兒は、楊元孫が母郭氏に隨って行った如く(『隋書』⁴³楊弘傳)、その多くは母親に連れて行かれたと思われるが、姻族の許に身を寄せるに當っては、七歳で父を喪つてから貧困のため姻族の敦煌郡張氏に依った如く(『朱文公集』²⁵「李素臺墓誌銘」)、一般に一家の大黒柱である父親が死去して家計が立ちゆかなくなったり、遺産が生計を立てるのに十分な額に達していなかったりするなど、經濟上困窮状態がその背景に存在していたのであろう。しかしながら更にもう一步踏み込んで考えると、父親の死後、孤兒を扶助すべき血族の結束力が弱かったり、血族の他の構成員の財力が不十分であつたりするなど、血族が孤兒を扶養する力を缺いていた状況が想像される。

姻族に歸した孤兒には、鄭孝本が外族の孤兒を別隔てなく育てたと賞揚された如く(『文苑英華』⁵¹孫逖「鄭孝本墓誌銘」、實子や血族の子と同様の待遇を與えるのが、士大夫の理想とされたと考えられる。寡婦や孤兒を受容れる姻族側も心得たもので、李佐の家の如く夫と死別した姉妹とその子のために數房部屋を用意した者も認められる(『文苑英華』⁵⁴穆員「李佐墓誌」)。姻族側の待遇もただ單に物質面で孤兒を扶養するばかりでなく、學問を教わる機會も孤兒に供えた。

姻族に身を寄せた孤兒に學問を授けたのは、皇甫績が三歳で孤兒となり、歸屬先の從兄とともに勉強をさぼって勝負事に打興じていたにもかかわらず、從兄だけを厳しく訓戒し、皇甫績は孤兒で幼ないという理由で大目にみた韋孝寬の如き外祖父が先ず認められる(『隋書』⁸³皇甫績傳)。更には孤兒に學問を授けた者として、韋丹が大伯父顏眞卿に従つて學問を習ひ明經に及第した如く(『朱文公文公集昌黎先生集』²⁵「韋丹墓誌銘」、大伯父が擧げられる。また顏惟貞が叔父殷仲容に書を教わり(『全唐文』³⁴⁰顏眞卿「顏惟貞碑銘」、韓宏が一旦は明經科合格を目ざして都に上るが名を擧げるのに十分でないことを放棄して伯叔父の劉玄佐に再びついて學問を習つたりした如く(同⁵⁶²韓愈「韓安神道碑」、伯叔父も孤兒を教育した。

前に士大夫の藏書に言及したが、それは同族だけが獨占使用するのではなく、例えば崔光が從弟の崔亮に藏書が豊かな隴西の李冲の家で學問をするよう促したり(『魏書』⁶⁶崔亮傳)、裴漢が稀觀本を他人から借りて寫したり(『周書』³⁴裴漢傳)、劉晝が郷里に書籍が少ないのを不満に思い、都に上り宋世良に許されてその藏書を恣に閱覽した如く(『北齊書』⁴⁴劉晝傳)、赤の他人に自分の藏書の借覽を許したものがみえる。顏之推は他人から書籍を借りた際の心得として愛護すべきことを説き、損傷があれば直すのが士大夫の嗜好の一つであると唱えているくらいであるから(『顏氏家訓』¹、寫本で書籍が宋代以降より少なかったとみられる北朝隋唐時代には士大夫間で書籍の貸借は頻繁に行なわれていたと考えられる。

他人同士で書籍の貸借が認められるのであれば、大量の藏書を有する家が姻戚關係にある士大夫にとり、それを利用するのは尙更容易であつたであらう。薛稷が外祖父魏徵の家の所藏する虞世南・褚遂良の書を臨書し(『舊』⁷³薛稷傳)、代々儒者の家に生まれた蔣乂は外祖父の吳兢の所有する史書を倦むことなく讀み、史才に長じたのは(『舊』¹⁴⁰蔣乂傳)、士大夫

が姻族から書籍を借りた例である。

蔣父が代々名儒を生んだ家の出身であるが外祖父所蔵の史書を讀んで史才に長じたことにみられる如く、たとえ自分の家に藏書があつても、士大夫の子弟は姻族所蔵の書籍を借覽することにより、自分の家では限られた範圍の學問しかできない弊害を克服し得たであろう。また姻族が書籍を有していたならば、極端な場合、書籍を購ったり所藏したりするだけの餘力のない士大夫にとり、それは旱天の慈雨の如く感ぜられたかもしれない。まして豊かな藏書を有する姻族の手許に引き取られた孤兒は、その藏書を容易に手にして讀めるという恩恵に浴したものと考えられる。

前に血族内の教育構造をみた折り、子弟を多く抱えた累世同居形態を取っていた楊惺の家では學館が設けられたと述べたが、かかる士大夫の學館には、受け容れた姻族の孤兒も血族の子供と机を並べたにちがいない。

以上、士大夫の姻族が孤兒を引取った場合、單に物質方面のめんどうをみるだけでなく、學問も授けたことを確認した。血族が何がしかの理由で孤兒を養い得ない場合、その力のある姻族が代わって孤兒を引取り、その身體を養うだけでなく、學問を授けて士大夫たるにふさわしい教養を身に附けさせたのである。そこには士大夫の血族と姻族とがお互いに扶助し合つて、兩者の中、いずれかが後生へ士大夫として習得すべき學問を傳えていった構造が看取される。婚姻關係を結んだ二つの家のいずれか一方が、學問を後生に傳播してゆく役割を果たせなくなる、つまり士大夫の子が士大夫たるにふさわしい學問を身に附けることができなくなり、その家の學問の途絶する危機に類した時、一族の團結力や財力が孤兒を養うのに十分な姻族の立場にある家が、孤兒への教育を通して相手の家を學問の火が消える危機から救つたのである。

ところで、これまで北朝隋唐時代の士大夫の間では、父親が死亡して孤兒が出た場合、姻族が血族に代わって扶助教育する關係が存するのを指摘したが、これは子孫を教育する上で通婚した兩家の間に相互扶助關係が成立していたと言えよう。かかる兩者の互助關係は、父親がなくなつて血族にその力がないため孤兒は姻族に頼らざるを得ない場合のみ作用するとは限らないのではあるまいか。前にみた如く、外祖父魏徵の藏書を借りた薛稷自身の家の所在地は不明であるが、徐

松の『唐兩京城坊攷』によると、父の兄弟の薛元超の家は長安城の崇仁坊にあり、一方魏徵の住宅は北郷の永興坊にあり、互いに目睫の距離に位置した。薛稷が薛元超と同居していたか否かは不明だが、薛元超の家と魏徵の家が近くにあったところから、薛稷は薛元超の家を経由して魏徵の家と容易に往來し、藏書を借り、時にはその年長者に教えを乞うたこともあるかと考えられる。

かく考えると、通婚した二つの家の間で、片一方の年少者が自分の家の年長者のみならず、もう一方の年長者から、その境涯が孤兒であると否とにかかわらず、教育を受けたものと思われる。血族と姻族とは、孤兒の有無にかかわらず、互いに補充し合って後生を教育したと考えられるのである。

士大夫の一つの家に着目した場合、その家が嫁を受容れ通婚した家は、同時期に一つだけとは限らない。通例、複数の家と通婚している場合が多いように思える。となれば、それだけ教育上扶助を受け得る家が増え、萬が一の場合にも學問が一つの家から途絶する危険性が低くなると考えられる。

これまで、六朝時代の士大夫は家において代々學問を伝える家學という教育形態を取ってきたと言われてきたが、一つの家という一系統だけではその教育基盤は危かつたであろう。それが、これまでの考察から、通婚を通して一つの家に複数の家が結びつき、その間に教育上扶助關係が成立することにより、後生への學問傳達が確實なものと化したと思われるのである。

前に述べたように、北朝隋唐時代において國家の教育機關はしばしばその機能を停止した。それにもかかわらず、漢族の士大夫が學問を傳承し得たのは、血族内の結束や姻族との互助關係という構造が成立していたからである。言い換えるならば、漢族士大夫は血族内の結束や姻族との互助關係を通して、國家から獨立して子弟を教育し得たのである。逆に『魏書』84儒林傳序に四二六年（始光三）に開いた太學へ盧玄・高允が徵せられたり、五二一年（正光二）に再開された國學において清河郡の崔光が『孝經』の講義を命ぜられたりとあるように、漢族の士大夫が國立學校の講壇に立ち、そ

の教育活動を支えたのであった。

これまで、漢族士大夫の家庭内教育の構造を論じてきたが、そこで論じた教育の擔い手は、血族・姻族のいずれにせよ、父・祖父・伯叔父などすべて男性であり、社會や家庭の半分を構成する女性については全く言及しなかった。北朝においては、江南とは對照的に女性がたくましく自立的で、家庭内では、女性上位の風がみられたことは、吉川忠夫氏により指摘されている⁽⁷⁾。唐代では、女性もボロに打ち興じるくらい、戸外活動に活潑に従った⁽⁸⁾。それでは、北朝隋唐時代の士大夫家庭では、教育は男性が専ら掌握し、旺盛な精神の持主たる女性が教育方面で腕を揮う餘地はなかったであろうか。近年、高世瑜氏が唐代の女性について多岐に亘って論じた專著『唐代婦女』を上梓し、當時の女性の受けた教育に言及している⁽⁹⁾。しかしながら、士大夫の家が學問を繼承していく上で、女性が何らかの役割を果たしたか否かという點については、十分論じ盡くしていないように思われる。そこでこの問題を考えるために、先ずは北朝隋唐時代の士大夫家庭において、女性が果たして男性と同様に學問教育を受けていたか否か、検討してみよう。

第二節 女性による教育

漢族士大夫の家庭で女子に施した教育内容は、柳鎮の母親范陽郡の盧氏が二人の娘に施した如く『唐柳先生集』12「柳鎮神道表」、圖史・箴誠を用いて嫁ぎ先で妻として母として恥ずかしくない振舞いができるよう教えたことが、先ず第一に挙げられよう。だが、女性だからと言って、専ら女性向けの教育を受けていたのではない。女性もまた、例えば潁川郡出身の陳夫人は『詩』と『禮』を習った如く『唐文拾遺』31王珣「陳夫人墓誌銘」、男性と同じく經學を學んだのである。士大夫家庭の女性たる者は、經學を含む學問を身に附けておくべきであるという考えは、趙郡の名族李華が外孫に當たる崔氏の娘二人に宛てた書簡から窺いえる。以下、李華の書簡に一瞥を加えてみよう。

八月十五日、翁崔氏の子兩孩に告げ省つまひらかにせん。吾出身入仕してより、行く行く四十年にならんとす。晩に汝が

母の已に汝二人を養う有り。吾裴氏・鄭氏・崔氏の諸姑、于氏の堂姑に事うるに逮び、皆賢明淑哲にして、内外の師範爲り。意汝とこれを言わんと欲す。裴氏の姑は恩慈にして、吾が一善を見るや、未だ嘗て涕を流し吾が成立するを祝わずんばあらず。吾が伯仲の書題を見て、疎略なるを誨責し、話舊事に及んで「この例無し」と云う。吾が伯仲の書題、今日の中外の書題に比べて、その閒疎密啻に百・十のみならざるなり。

吾小き時、猶長幼を省る。毎日兩時櫛盥す。起居行いを尊くし、三時食に侍る。飲食し訖わり、然る後敢えて食らう。猶禮の如くせざるを責む。今者諸子日出づるも高く眠り、争うて器を覽般す。何ぞ曾てこの儀有らんや。爲に歎息すべし。世教かくの如し。何ぞ亂れざるを得んや。

婦人も亦書を読み、文字を解するを要す。今古の情狀を知り、父母舅姑に事え、然して咎無かるべし。『詩』(周南關雎)の序に曰く、「窈窕を哀れみ、賢才を思う。而して善を傷つくるの心無し。」と。是れ關雎の義なり。『易』(家人)に曰く、「中饋を主り、遂ぐる攸無し。」と。婦人は但だ當に酒食を主り、賓客を待つべきのみ。その餘は自ら専らにするの禮無し。『詩』(國風鄭女曰鷄鳴)に云う、「將に翔けんとし將に翔けんとし、玉・瓊琚を佩す。」と。これ舅・姑を奉じ祭祀を助くるの儀なり。又(有女同車)に曰く、「將に翔けんとし將に翔けんとし、鳧と鷹を弔す。」と。これ酒食を主り賓客を待つ儀なり。禮經の載する所、汝それこれを記せ。

又婦人將に嫁せんとする三月、公宮において教ゆ。祖廟既に毀たるれば、宗室において教ゆ。嫁すれば則ち廟見す。廟を見ざる者は、婦爲るを得ず。今この禮淺夷し、人苟且に従う。婦人は丈夫より尊ばれ、群陰は太陽を制す。世教の淪替すること、一にここに至る。爲に涙を墮とすべし。汝等『詩』・『禮』・『論語』・『孝經』を讀むを學ぶべし。これ最も要爲るなり。

吾小き時、南市の帽行にて、貂帽多く帷帽少なきを見る。當時舊人已に風俗を歎く。中年西京の市に至るや、帽行に乃ち帷帽無し。貂帽も亦無し。男子は衫袖もて鼻を蒙い、婦人は領巾もて頭を覆う。向に帷帽・羃離有らば、必

ず瓦石の及ぶ所と爲る。これ乃ち婦人は丈夫の象を爲し、丈夫は婦人の飾りを爲す。これを顛しこれを倒すこと、これより甚しきはなし。

類に觸れて長ずれば、言うに勝うべからず。その一端を擧げ、汝に告げ及ぶのみ。幼少なれば、訓誠に違わずと謂うなかれ。見る所・聞く所、風を類し俗を敗る。故に舊事を申明するも、一一なる能わざるなり。阿馬來たれ、説かん。汝數十篇の詩賦を誦し得たり。麗麗、已に能く十五姉の顔色を承く。十七伯極めて鍾念す。吾旅にて病むも、乍ち聞き甚だ意を慰む。

凡そ人は行いを尊くして慈訓せざるを患えず、身承順する能わざるを患うのみ。汝十五姉の仁慈、十七伯の訓誘を承く。又質性柔順なり。當に扶けずして自ら直くする者なるべし。吾告ぐる所の者、汝が耳に括羽せよ。不次。

翁崔氏二氏に告げて省らかにす。〔『全唐文』³¹⁵李華「外孫崔氏二孩に與うるの書」〕

右の書簡を綴った李華は新舊兩唐書に立傳されているが、『舊』¹⁹⁰下の本傳によると、七三五年（開元三）に進士に合格した。書信の卷頭に、仕官してから四〇年になろうとしているといつてあるのを文字通りに受取つたならば、七五年（大曆一〇）にこの書簡を草したことになるが、『新』²⁰³の本傳によると大曆初めに死去したとあるので、それ以前に書かれたとみてよいであろう。李華は『新』²⁰³の傳によれば、七五五年（天寶一四）に勃發した安史の亂の際、安祿山から官を受けたかどで、反亂鎮定後、杭州司戸參軍に貶せられた。以後、死ぬまで長安に足を踏み入れず、一貫して江南に留まつたようであつた。七六二年（寶應元）に荊南節度使に赴任してきた李峴の辟召を一旦受けたが、リユーマチのため辭して楚州山陽縣に住んだ。書簡中、旅に病むとあるので、書信が書かれたのは七六二年以降、死去する大曆年間初期の間であり、山陽においてであろう。

この手紙は、李華が恐らく安史の亂以前長安で目睹したであろう風俗・風潮を歎き、孫娘に守るべき生活上の心得を諄々と説いた愛情に溢れたものである。書簡中、婦人も書物を讀み、文字を理解しなければならぬと説き、更に具體的に

『詩經』・『禮記』・『論語』・『孝經』を読むべきであると書名を擧げて諭し、讀書が最重要事であるとまで斷じ切っている點に注目したい。李華がかくも讀書を重要視するのは、經書を引きつつ婦人が遵うべき行爲を説いている點からみて、李華に禮制に基づいた家庭秩序が築かれなければならないという思いがあったからであろう。

李華は孫娘に讀書を勧め、具體的には經書を読むよう慫慂したが、當時の女性が學んだのは何も經書だけに止まらない。例えば弘農の楊藝は兄たちと同様に、經・史・子・集の四部に互って學ぶことが許されたのであった(『唐文拾遺』32 楊檢「楊藝墓誌」)。

それでは實家において學問を習得した士大夫の娘は、婚家において何ら役割を果たさなかったものであろうか。次に、その點を検討してみよう。

北朝隋唐時代に女性の再婚の風が世を覆ったことは、太山郡鉅平縣の羊氏一門の女性が再婚しない家風が世の賞賛を浴びたり(『北齊書』43 羊烈傳)、隋の煬帝が即位してから婦人に節操がないとして九品以上の者の妻が再婚するのを禁じた命令を下したことから(『隋書』75 劉炫傳)、窺えるであろう。しかしながらかかる風潮下においても、再婚を拒んで婚家に留まり亡夫の妻としての立場を貫き、母親として子育てを全うした女性の姿も散見する。例えば、清河郡の名族崔彥穆の娘で滎陽郡の鄭誠に嫁し、鄭誠に周隋交代期に楊堅に叛旗を翻した尉遲迥と戦って陣没した後、父に再婚を迫られたが肯んぜず、子の鄭善果を育てるのに一生を捧げた崔氏は、その一例である(『隋書』80 鄭善果母傳)。

夫が死去した後、妻が夫に代わって遺児を教育した例は、少なからず見受けられる。例えば、張宴之は母鄭氏に教誨され(『北齊書』35 張宴之傳)、孔若思は母褚氏に教訓されて學行を以て名を知られ(『舊』191 上孔若思傳)、盧於陵は母苗氏から書を読んでもらったり文を學んだ(『朱文公校昌黎先生集』34「盧於陵墓誌銘」)。

母親が我が子に教授した内容は、母夏侯氏が皇甫和に(『北齊書』35 皇甫和傳)、母盧氏が李紳に(『舊』173 李紳傳)各々授けた經學が先ず擧げられる。具體的には辛公義が母親から教わった『尚書』・『左傳』・『公羊傳』・『穀梁傳』であり(『隋

書』37辛公義傳)、殷攝・寅・克・濟等を教誨した殷踐猷夫人蕭氏が讀んだ『論語』・『周易』などであつたろう(『顏魯公文集』10「殷踐猷墓銘」)。更に經書の他に、李則の母の如く百家の書を修めた女性は、史・子・集三部の學問も子供に教えたものと思われる(『李文公集』15「李則墓誌銘」)。

母親が遺兒を教育する場合、本來子弟教育に當たるはずであつた父親が死去して居ないという事情に加えて、例えば房景先の如く貧乏のために師に隨つて教育を受けるのに必要な學費を捻出できなかったり(『魏書』43房景先傳)、白幼文・白居易・白行簡の如く師に就くのに十分な年齢に達していないという狀況があつたのであろう(『白氏長慶集』29「白季庚事狀」)。

以上みてきた如く、遺兒に學問を直接授けるのに骨を折つた士大夫の家から出身した母親には、例えば己が子に師について學問を習わせた高謙之の妻張氏が子供たちに生前高謙之が學問を情らなかつた姿を説き、學問を絶やしてはならないと訓戒する言葉の中から讀み取り得る、士大夫たる資格となる學問を家からなくしてはならないという強い責任感があつたものと思う(『魏書』77高謙之傳)。

ここで母親の立場にある女性から士大夫家庭の他の立場にある女性の構成員に眼を移すと、子供に學問を教えた女性は母親だけに限らないことがわかる。

最も身近なところからみると、姉の顏眞定が弟の顏元孫と顏惟貞に『詩』と『書』を教えた如く(『全唐文』34顏眞卿「殷府君夫人顏眞定神道碣銘」)、姉が弟に學問を授けた例がみられる。

姉より更に遠い關係にある祖母も、孫を育て學問を授けたとみられる。祖母が孫を育てた例は、例えば祖母宋氏が崔仲哲を(『魏書』49崔仲哲傳)、祖母高氏が刁冲を(同84刁冲傳)、各々養つた例が挙げられる。祖母の許でも、例えば祖母姜氏が徐堅に學問を志すよう教誨した如く(『曲江張先生文集』19「徐堅神道碑并序」)、學問教育が重視され、祖母からも學問を授かつたものと思われる。

祖母以外にも、例えば盧柔の如く叔母が孤兒を育てた例や（『周書』32盧柔傳）、韓愈が三歳で父と死別した後養われていた兄韓會にも先立たれた後にその妻鄭氏の扶養を受けた如く、嫂が孤兒を育てた例が認められる（『新』116韓愈傳）。盧柔の場合、學問を好み、成人前に文章を綴ることができたが（『周書』32盧柔傳）、學校へ行つたと明記されていないところから、或いは叔母から學問を教わつたのかもしれない。

ところで、これまで一人の女性が一人の孤兒を教育する例ばかりをみてきたが、薛元曖の妻で、五經を涉漁し文章を綴ることのできた濟南の林氏は、薛元曖の死後我が子彥輔・彥國・彥偉・彥雲のみならず當時幼い孤兒だった甥の播・據・摠も訓導して開元・天寶年間には七人が續けざまに全員進士に合格するに至らしめた如く、太っ腹で逞しい女性もみられたのであった（『舊』116薛播傳）。

かくの如く姉の立場にあった女性は實家において、祖母や叔母の立場にあった女性は婚家において、各々子供の教育に當るべき男性が缺けた時に、代わって孤兒に學問を授けたのは、母親の立場にある女性同様、士大夫の家から學問の火を消してはならないという責任感が強くあつたからであらう。

これまで成人女性が一人だけで父親を失つた子供を教育したのをみてきたが、士大夫の家においては子供を教育できる成人女性が一人だけだと必ずしも限ってはいない。とりわけでも累世同居の如く複数の家族が集合して住む場合には、複数の女性が共に生活していたであらう。士大夫の家で、複数の女性が起臥を共にしていた様子は、顏眞卿の綴つた一文「崔沔宅陋室銘記」（『顏魯公文集』14）から窺うことができる。それを次に引いておこう。

延和・太極の間、公既に東都に留司し、遂に乘る所の馬を齧ぎ、故人監察御史張沔の子深に就きて河南府崇政坊に宅を買い以て居を製り、宗廟を西南に建つ。維れ先太夫人安平郡夫人の堂は、宅の中に在り。儉やかにして陋からず、淨らかにして華やかならず。六十餘年、棖棟故の如し。堂の東は、嫂盧夫人の居る所なり。堂の東北は、鄭氏・李氏の姉の歸寧して居る所なり。堂の北五歩の外に、瓦堂三間を建てて以てこれに居る。舊き椽を雜え用い、壇を崇くせ

ず、緒望無し。清要を累歴し、得る所の祿秩は、但だ蒸嘗を奉じ、嫂・妹（姉？）を資け、孤幼に給し、甥姪の婚姻を營むのみ。朝衣・服・馬は、一に皆その下の者を取る。唯だ祭器・祭服のみ禮に稱う。その室は、竟に修めず。衆夫人太原郡太夫人王氏牀帳を捐つるの後、公他室に徙居す。或いは賓館に在り、而して常所無し。常侍爲りし時、『陋室銘』を著わし以て自ら廣む。天寶末、子孫灑掃し書籍・劍・履を貯うるのみ。逆胡再び洛を陷いれ、屋遂に崩圯す。唯だ簷下に廢井のみ存す。

顏氏が描寫した住居は、もと博陵の名族で長安に徙つた崔氏の一族崔沔が七十二年（延和元年と太極元年の間）に洛陽の崇政坊にあつた張深の家を購つたもので、七五五年（天寶一四）に安祿山が洛陽に侵入し、七六〇年（上元元）に史思明が再び洛陽を占據し、二度に互る軍靴の蹂躪を受けるまで存した。

顏氏の描いた崔沔の邸宅には、宗廟とともに崔沔の母、嫂の盧氏、崔沔夫婦の居室が備わっていた。更に文中に「鄭氏・李氏の姉の歸寧して居る所」とある居室は、同じ文に「（祿秩を）孤幼に給し、甥姪の婚姻を營むのみ」とあり、鄭氏と李氏とに嫁いだ姉が夫と別れ、子供を連れて戻り住んでいる所であらう。したがって七一二年にここに移ってから、崔沔の母・嫂・姉・妻の五人の女性が共に生活したことがあると言えよう。

崔沔の住居は華美に流れず、朝衣・服・馬は最低のものを選び、家に貯えていたものは書籍・劍・履物だけという質素な生活を送る一方、祿秩を祭祀のために投じ禮に稱つた祭器・祭服を備えるという禮を重んずる態度を持っていた。それなるが故に、崔氏の家は「清儉なる禮法を以て、士流の則と爲る。」と評された（『舊唐書』崔祐甫傳）。一般に家において禮制が貫かれるためには、禮と結びついた學問が十分教育されていることが必要であらう。崔沔の周圍の人々をみると、兄の崔渾は賢良方正科、崔沔本人は進士科と賢良方正科、崔沔の長子崔成甫と次子崔祐甫はいずれも進士科、に合格しており、家においてよく學問が教育されていた（『顏魯公文集』¹⁴「崔沔宅陋室銘記」）。

崔沔の家の如く、一家の大黒柱たる成人男性と複数の成人女性が共同生活を営んでいる場合、男性が男兒の教育を引受

け、女性が女兒専門の教育を擔當したと思われるが、男性が缺けた場合には複数の女性が協力して女兒のみならず男兒の教育に當つたものと考えられる。

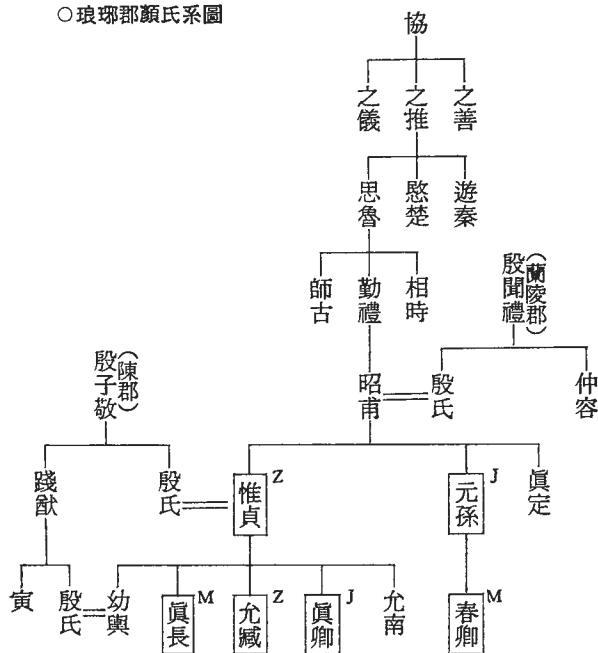
以上、士大夫の娘による子弟教育について論じたことを要約すると、士大夫である實家で學問教育を受けてきた女性は、婚家において子弟が學問を放棄したり、できないような狀況に陥って士大夫が代々受継いできた學問の火が消えるのを防ぎ、その家が士大夫の家としての面目を失うのを押し止めたと言ってよいであろう。かかる役割を果たした女性が士大夫の家から嫁したことを考えると、士大夫の家同士の通婚が、士大夫の家における學問の繼承を助けたのである。

士大夫の家では、特定の子供からみて母親の立場にある女性以外にも、祖母・伯叔母・嫂の立場にある女性も學問を授けた。祖母と嫂が別の士大夫の家において學問教育を受けて嫁いできたことを考えると、一つの士大夫の家が複数の士大夫の家と通婚することにより、單數の士大夫の家と通婚した場合より、學問がその家において中絶する危険度を低くしたとみられる。

前に姻族の立場にある士大夫により孤兒が教育され、學問を繼承したことを確認したが、その教育は姻族である士大夫の家の學問的傳統・蓄積が背景にあったと明らかに言い得る。今また士大夫の家から嫁してきた女性により子弟が教育され、學問を受け継いだことをみた。嫁してきた女性は家そのものでなく一個人に過ぎないけれども、彼女が學問を授けられた實家が士大夫の家であることを思えば、彼女は實家の學問的傳統・蓄積を背負って嫁してきた、婚家からみて姻族の士大夫の家の學問的傳統・蓄積をその體とともに持ってきたと言える。結局のところ、士大夫の家が通婚關係を結ぶことは、ただ單に姻戚關係を結んだというに止まらず、その家が、士大夫の存立する根據である學問を繼承していく構造をより確固たるものにしたと言える。然るが故に、士大夫は、國家の手になる教育機關の興廢に翻弄されることなく、それから獨立して連綿として代々學問を傳え得たのである。

北朝以來、士大夫の家は血族或いは姻族が協力するという構造に立脚して學問を繼承し、唐代において科擧合格者を出

○琅琊郡顏氏系圖



したことは、これまで擧げた顏眞卿（第二章）、畢沅（同上）、韋丹（第三章第一節）、薛彥輔・彥國・彥偉・彥雲・播・據・摠（第三章第二節）の諸例が示している。我々は唐代において士大夫の家が學問を繼承していった様子を、各家が科擧合格者を數世代に亘って輩出した事實から看取できるが、ここでは紙幅の關係からそのすべてを確認することは他日に譲り、最後に、學問の家と當時目されていた琅琊郡の顏氏を取り擧げ、確めることとする。

顏氏は、『晉仙傳』・『日月災異圖』を撰し『梁書』50文學傳下に立傳された顏協をはじめ、その子で『顏刺史集』を綴

□で囲んだのは、科擧合格者である。右肩に記したJは進士であり、Mは明經で、Zは制科で、各々合格した科を示す。

※系圖作成に當つて、参照した文獻は、以下の通りである。

- ①『元和姓纂』4
- ②『梁書』50、顏協傳
- ③『北齊書』45、顏之推傳
- ④『舊唐書』73、顏師古傳
- ⑤同73、顏遊秦傳
- ⑥同128、顏眞卿傳
- ⑦『新唐書』192、顏春卿傳
- ⑧『全唐文』340、顏眞卿「顏惟貞碑」
- ⑨同341、顏眞卿「顏幼輿神道碑銘」
- ⑩同341、顏眞卿「顏允臧神道碑銘」
- ⑪『顏魯公文集』10、「殷踐猷墓碣銘」

った顔之儀、『顔氏家訓』を世に残した顔之推、更にはその孫で、『漢書』に注を施した顔師古など、學問上、足跡を記した人々を六朝末期から唐初にかけて、輩出したが、六八五年（垂拱元）に至って顔之推の玄孫顔元孫が進士科に登第してはじめて科舉合格者を世に送った（『舊』187下顔杲卿傳）。顔元孫以後、あたかも堰を切ったかのように、顔氏からは顔元孫の弟惟貞、元孫の子春卿、惟貞の子貞長・貞卿・允臧の五人が續々と科舉に及第した。顔氏の場合、その學問上の力量が、顔元孫に至って科舉に向けて發揮されたと言えよう（琅邪郡顔氏系圖參照）。顔氏の學問上の力量は世代から世代へと傳わったものであるが、顔氏がよく學問を傳え得たのは、前にみた如く、血族の男性（第二章）及び女性（第三章第二節）、姻族（第三章第一節）の協力があつたからであらう。具體的には、顔元孫・惟貞兄弟は孤兒となつた折り、姉の顔眞定と姻族の殷仲容から學問を教わり、顔眞卿は孤兒となつた時、伯父の顔曄（元孫・兄の允南から學問を授けられた。顔氏の場合、女性である顔眞定、男性である顔曄（元孫）・顔允南、姻族の殷仲容の協力が全くなかつたならば、それまで受け継いできた學問は途絶したかもしれない。顔氏からは、血族と姻族の互助が重なつた構造に依つて學問を繼承し、科舉合格者を生んだことが看取できる。顔氏にみられる如く、漢族の士大夫の家は上述の構造に依據していたからこそ、北朝以來學問を傳え、唐代に至ると科舉においてその學問上の力を振い得たと言えよう。

結 語

小論では、北朝隋唐時代における士大夫の教育の構造を考察した。従来、六朝時代の教育の中心は學校ではなく士大夫の家にあつたと認識されてきたが、これは六朝時代の士大夫にとり、學問を子弟に教育する據り所が家であつたと言い換えることができる。小論では學校が貞觀時代に最盛期を迎え、安史の亂が勃發した七五五年（天寶一四）より前は、則天武后期の約二〇年を除いて、大むね機能していたけれども、安史の亂以降、著しく衰微した唐代においても、士大夫の學問教育の據り所が家であつたことを確認し、次に北朝隋唐時代の士大夫の家の教育構造を考察した。考察の結果は、父

親が子を教育するのが通例であったが、父親ができない場合には、血族の男性が代行し、血族で教育を行い得ない時は姻族の男性が引受けるという、血族内の相互扶助、二つの家（血族と姻族）の間の相互扶助の構造が成立していたのが認められた。更に子弟教育に當ったのは男性ばかりでなく、他家から嫁いできた女性もまた、男性が何らかの事情で子弟を教育できない場合には、學問を授けた。姻戚關係にある士大夫の家や、その家で教育を受け嫁いできた女性が子弟教育に當たり、相手の家から學問が途絶えるのを防ぐ構造が成立していたのである。以上の事實を踏まえるならば、北朝隋唐時代の士大夫にとり學問を教育・繼承してゆく最後の據り所は、ただ單に家であつたと言うだけでは不十分であろう。

先ず血族内の互助關係に着目することが、必要である。しかしながら、單一の家にのみ注目するだけでも、十分でない。婚姻で結ばれた家と家との間に成立した相互扶助の構造にも、眼を向ける必要がある。一つの家が婚姻關係を結んだ家は、單數でなく複數と考えられ、互助關係の糸が幾本も結ばれ、學問の燈が家から消える危険性が低くなったものと思われる。

かく單一の家における血族間の互助關係、婚姻を通して成立した家と家との互助關係が幾重にも積み重ねられた構造こそ、士大夫の家が學問を代々繼承してゆく上で、最も安定した據り所であつたと言えよう。かかる構造に依據することにより、北朝隋唐時代の士大夫は、幾多の戦亂・貧困などの困難を乗り切り、國家に全面的に依存することなく、學問を連綿と傳え得たのである。唐代においては更に科擧で學問的力を振うことができた。

最後に、小論が残した問題を擧げて、締めくくりとしよう。第一の問題は、南朝の士大夫の教育構造を考察しなかつたので、その必要があろう。第二は小論では北朝時代から隋唐時代にかけて、士大夫の學問教育の連續性を探ることを主眼としていたので、則天武后期以來科擧の進士科を通して政界に進出したとされる新興階層を舊來の士大夫と區別して、それが學問教育を受ける具體相を考察しなかつた。第三は、北魏以來、政權に参加した鮮卑人が漢文化を受容し（漢化）、士大夫へと轉身していく過程・構造については、全く検討しなかつた。いずれも、他日、稿を新たにして検討を加えたい。

註

(1) ①森三樹三郎『六朝士大夫の精神』(同朋舎、一九八六年)九頁、一一―一二頁。

②谷川道雄『中國中世社會と共同體』(國書刊行會、一九七六年)二九七―二九八頁。森・谷川兩氏は、六朝士大夫の要件が學問を身に附けていることと、述べている。

③宇都宮清吉『中國古代中世史研究』(創文社、一九七七年)六四八―六四九頁、六五六頁。

宇都宮氏は、唐代の士大夫が文化の指導者・創造者であり、士大夫にとり家門の社會的地位と財富と教養の三つが密接な關係のある生活觀念であつたと述べている。

④今堀誠二『唐代士族の性格素描』(一)(『歴史學研究』九一一、一九三九年)。

『隋書』46李雄傳、

「家世並以學業自通。雄獨習騎射。其兄子且讓之曰。

『棄文尚武、非士大夫之素業。』雄答曰。『竊覽自右誠

臣貴仕、文武不備。而能濟其功業者鮮矣。雄雖不敏、頗

觀前志、但不守章句耳。既文且武、兄何病焉。』子且無以應之。」

右の記事は、六朝時代の士大夫の要件が學問であつたことを傳える。

(2) 陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』(上海古籍出版社、一九八二年)一七頁、二一頁、同上『唐代政治史述論稿』(上海古籍出版社、一九八二年)七二―七三頁。

(3) 學校が衰退したことは、以下の箇所に記載されている。

多賀秋五郎『唐代教育史の研究―日本學校教育の源流―』(不昧堂、一九五三年)一六八―一八五頁、二五〇―二六三頁、三三四―三七頁。

(4) 王仲犖『北周六典』(中華書局、一九七九年)。

(5) 註(1)③書、六五三―六五四頁。

氏は唐代士大夫の財産として、土地・碾硯・店舗等の不動産、奴婢・莊客の勞働力とともに、書籍を擧げている。特に書籍を、士大夫にとり教養を與え精神生活を豊富にするばかりでなく、士大夫の家の本質的使命である官人となつて位におり、人民を教養するという任務遂行のために必要不可欠のもので、本質的な財産と強調している。

(6) 註(1)①②③④、(2)、(3)の論者は、いずれもかかる點を考察していない。

(7) 吉川忠夫『六朝精神史研究』(同朋舎、一九八四年)二七七頁。

(8) 向達『唐代長安與西域文明』(生活・讀書・新知三聯書店、一九五七年)八五―八六頁。

(9) 高世瑜『唐代婦女』(三秦出版社、一九八八年)一三八―一四二頁。

多賀秋五郎氏も『唐代教育史の研究』において、女性に對する教育と女性による子女教育について觸れているが、士大夫の家が學問を傳えていく上で、貢獻したか否か、という觀點からは、十分論じていない。

THE PROBLEM OF EDUCATION FOR THE SHIDAFU 士大夫 IN THE AGES OF NORTHERN DYNASTIES, SUI AND TANG

OSABE Yoshihiro

The theme of this article is how the children of the shidafu were educated in the ages of Northern Dynasties, Sui and Tang.

National schools whose function were sometimes suspended, and private ones, were not the only places they depended upon for the education of their children.

But it was rather their home which played the central role for this purpose — not only their kin but their matrimonial relatives as well, sometimes contributed to the practice. There were also cases where women who had received education at their own home devoted themselves to education in the families they married into.

It can thus be concluded that without solidarity among the kin and cooperation from the matrimonial relatives, the shidafu could not have handed down scholarly knowledge to their descendents.

IMPERIAL CONSORT IN THE MIDDLE OF MING : ZHANGSHI 張氏 BROTHERS

SATO Fumitoshi

From the point of view of the position within the regime, the imperial consort of Ming didn't play an important role so much. But the distinguished Imperial relatives (xunqi 勳戚), eunuchs and imperial families etc., which ought to live on an annual allowance primarily, were parasitic on the production of goods and the monetary economy, which developed especially